

キリスト教研究所

創設30周年によせて

加山 久夫

「新しい時代の内容は新しい皮袋に盛られねばならない。ノスタルジアはこの聖句に帰って行き、再び新しい意志となって燃えあがった。明治学院大学キリスト教研究所は、かくして一九六六年四月に、大学附属の研究所として新しい出発をした。敬愛する村田四郎前学長を名誉所長に、所長園部不二夫教授以下所員一同日夜真剣な祈りと努力をもって研究・調査に当たっておられる。」これは、若林龍夫学長（当時）が研究所紀要創刊号に寄せられた序のなかの一文です。

文中の「ノスタルジア」とは、「1930年日本神学校（今の東京神学大学）の創設の際、これと合体するために、永久に学院を離れていった明治学院神学部に対する郷愁である。」と、序文に述べられています。もし可能ならば、新たにそれに代わる「基督教学科」の創設をと希いつつ、果たしえなかった夢をキリスト教研究所という「新しい皮袋」として実現したのです。したがって、当初、所員はキリスト教学担当教員のみによって構成されていました。しかし、実際には、それ以外の多くの諸先生方が紀要に寄稿され、研究活動に参加してくださっていました。定年により引退されたり、永眠さ

れた先生方が当時、専任講師や助教授として寄稿されているのを拝見しますと、深い感慨を覚えます。

1985年4月、本学が横浜キャンパスを開設するに際して、研究所は所員構成を全学的に開かれたものとし、文字通り大学付属に相応しい形となりました。それは、研究所創設の翌年、紀要1号に創刊の辞として、村田四郎先生が述べておられるつぎのようなお考えとも軌を一にすることであったと思います。「此の研究所が基督教神学の中核をなす、聖書学、教義学、教会史学等の研究に力をつくしてゆく事がのぞましいのであります。今や明治学院大学には文学科、経済学科、社会学科、社会福祉学科、法学科等、文化の諸学を持つ総合大学である現状を思うと、此の研究所が、ただ狭義の基督教神学だけにとちこもらないで、恰く文化事象に関連をもって基督教の学的検討に入ってゆく事に、此の上なきよき共同研究者をもつ事が可能である、と信ずるのであります。と同時に日本の基督教運動の過去、現在の歩みに正確な理解と深い洞察をあたえられて、それによって未来への妥当な見通しをもつ事ができるような役目をはたし得たならば、真に有意義であると考えます。」

果たしてこのような付託にどの程度応え得ているのか忸怩たるものがありますが、専門分野を異にする所員各位をはじめ、学内外の多くの方々のご協力を得て、課題をになってゆきたく願っています。皆様のご支援をおねがい申しあげ

ます。

キリスト教研究所創設30周年を記念して、来る11月30日（土）午後2時より本館1255教室にて、森井眞先生による公開講演会を予定しています。多くの方々のご出席下さり、明治学院大学キリスト教研究所30才をお祝いくださいますよう、併せお願い申し上げます。

（かやま ひさお
所長、一般教育部教授）

† † †

1996年6月21日 公開講演会要旨